NMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNM

会　報

2008年5月10日　No. 4

ニチメン東京社友会

〒107-8655 東京都港区赤坂2－14－7 双日㈱内 17F
URL http://nmtkshayukai.hp.infoseek.co.jp/
E-mail menkwa@sojitz.com

NMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNM

【目　　　次】

【ページ】

1．新会長挨拶　於 新年賀詞交換会……… 会　長 丸山 修作 ……… 2

2．新年賀詞交換会開催 ……… 世話人代表 倉又 則夫 ……… 3
挨　拶　於 新年賀詞交換会……… 前 会 長 河西 郁夫 ……… 4
御 挨 拶 ……… 双日㈱会長 土橋 昭夫 ……… 5
双日㈱社長 加瀬 亨 ……… 6
新年賀詞交換会、盛況裡に開催される － ご協力の皆様に感謝 －
……… 世 話 人 髙木 亨一 ……… 7
賀詞交換会　出席者名 ……… 8

3．社友会総会・懇親会開催の御知らせ ……… 9

4．2008年度ニチメン東京社友会年会費支払いについて ……… 9

5．新規加入者リスト ……… 10

6．会員投稿文；回想録、エッセイ等
① 春日雑感 ……… 丸山 修作 ……… 11
② 欧州ニチメンの変遷 ……… 河西 良治 ……… 12
③ 最近のフランス事情 ……… 廣岡 幹雄 ……… 14
④ デュッセルドルフの想い出 ……… 坂井 啓治 ……… 16
⑤ ベルリンの壁を形骸化したハンガリーの穴 ……… 山田 寛治 ……… 18
⑥ イタリアへの想い ……… 越野 量路 ……… 20
⑦ ＮＫＢ回想 ……… 吉水 稔 ……… 21
⑧ スペインの思い出 ……… 箕作 武彦 ……… 22
⑨ ドバイ駐在の帰途、九死に一生を得る ……… 利根川慎治 ……… 26

7．追　悼　文
手塚敏夫さんの想い出 ……… 高尾 勝 ……… 27
濱田雄三さんを偲ぶ ……… 奥田 哲 ……… 28
住山忠雄さんを偲ぶ ……… 福原 昭二 ……… 29

8．訃　報 ……… 30

9．訂正とお詫び ……… 30

10．社友会役員・世話人一覧表；名前、TEL No. & 写真 ……… 31

11．編集後記 ……… 長谷川 洋 ……… 32

新　会　長　挨　拶

於　新年賀詞交換会

会長　丸　山　修　作

まずは、皆さん、新年明けましておめでとうございます！
（会場から、多数の声「おめでとうございます！」）

河西郁夫さんの後を継いで私が引受けることになりました。よろしくお願い致します。

今日は大変寒いところ、かように沢山のOBの方がお見えいただいておりまして、心から御礼を申し上げたいと思います。
特に双日株式会社からはご多忙のところ、土橋会長、加瀬社長ほか、役員、幹部の方々が多数この席にお見えいただきまして、心から感謝をしたいと思います。

扨て、河西郁夫さんには、2004年長らくニチメンのOB会として運営されて参りました長月会がその幕を閉じまして、それ以降多くのOBから、110年の歴史と伝統を持つニチメンにOB会がないというのは極めて残念である、という声を真剣に受け止められまして、ニチメン東京社友会の設立を決意し、自ら初代の会長に就かれまして、今日ここにこのように立派な、社友会としては初の新年会を開催するに到るまでの実行力に、心からなる敬意と謝意を表したいと思います。

併せ、社友会設立準備段階から文字通り手弁当で世話人会に参集して、今日まで協力をしていただきました倉又代表を初めとする十数人の世話人の方々に対しても、心から御礼を申し上げたいと思います。

折角面目一新して再発足致しましたOB会であります、社友会であります。
その勤務年限は別といたしまして、ニチメンに勤務しておった、ニチメンに働いておった、という誇りを少しでも感じ得る存在として、今後とも永続して行きたいと念願しております。
とは申せ、現在の世話人は皆年寄りです。いずれ、と申しますか、今すでに、くたびれております。（笑）
財務状況は、会員の皆さんの年会費が主たる収入源でありますので、必ずしも健全とは申せません。

世話人の方々には老骨に鞭打って、いましばらく頑張って頂くとして、会員の数をこれからも増やして行かねばならないと思っております。
本日ご出席のOBの方々の身の周りにまだ入会しておらないという方がお見えでございましたら、是非ご勧誘をしていただきたいと思います。

昨年来から、アメリカのサブプライムローンの破綻、原油の高騰、と、大変厳しい状況を迎えておりますが、ただいま土橋会長、加瀬社長の大変力強い、双日株式会社に対する、将来よくなる、という確信に満ちたお言葉をいただきまして、我々も大変嬉しく思っております。

是非とも双日株式会社が今後とも一層繁栄されることを心から祈念すると共に、引き続き社友会に対して絶大なるご理解とご協力をお願いしておきたいと思います。

最後に当り、本日ご出席の皆様のご多幸とご健勝を祈り、2008年がよりよい、輝かしい年になることを願って、挨拶に代えたいと思います。
どうも有難うございました。（大きな拍手）

新年賀詞交換会開催

世話人代表　倉　又　則　夫

平成20年の幕明け間もない1月18日、当会初の試みとして新年賀詞交換会が催されました。
当日は季節相応の寒さながら好天に恵まれ、危ぶまれた出足は好調で会場前から多くのニチメンOB・OGの方々が赤坂と云う良き立地の双日㈱本社西館7階の会場に姿を見せられ、至る所に和気藹々の人の輪が出来ておりました。

広い会議室を会場として提供してくださり、設営にご協力戴きました双日㈱の関係者の皆様には誌面を借りまして改めて厚く御礼申し上げます。

さて定刻の12時には、双日の土橋会長、加瀬社長を始め多くの役員の方々も駆けつけて下さり、会場も満員の盛況、あとで集計すると188名の多きに達したとのことでした。
河西会長の賀詞に始まり、土橋会長、加瀬社長のご挨拶を頂戴したあとは、これも当会の新企画である御長寿者表彰が行われました。
今回の対象の方々9名の内、山口良孝さん、土橋久男さん、柿本寅之介さんがお元気なお姿を見せられ参加の皆さんから称賛と祝福が寄せえられました。

かくて宴もたけなわ、皆去りがたい思いながら、午後二時半河西良治新副会長の中締めにて盛会裏且つ一人の故障も混乱もなく無事新年会を終えることが出来、世話人一同安堵感と達成感に浸たされた次第です。

尚、当会創立に尽力され、その後も会長として会を引っ張ってこられた河西郁夫さんが一身上の都合にて、この新年会を持って会長を辞されることになりました。
本当にご苦労様でした。
会長には、丸山修作さんが就任されることを参会の皆様にご披露申し上げました。
全会員の皆様には茲許御報告申し上げます。

新会長のもと、私共世話人一同、より良き会の運営の為、一層努力する所存ですので会員の皆様方の益々のご協力を御願い申し上げます。

挨　　拶

於　新年賀詞交換会

前会長　河　西　郁　夫

ご参集の皆さま、明けましておめでとうございます。

今日は外の非常に寒い中、このような第一回の我々の新年賀詞交換会にご出席下さいまして、心から御礼申し上げます。さらに、只今お話ございましたように、双日さんの特別のご配慮でこんな立派な宴会場を設営させていただきまして、更にその上に一月で一番ご多忙のところを、会長、社長には、先日11日に大阪であったのでございますが大阪の社友会に引き続き、東京にも、お二方にご出席くださいまして、誠にありがたく、厚く御礼申し上げます。

そのほか、双日の、私共が常にお世話いただいてご厄介になっております秘書、人事、広報の部課長さんの方々もご出席くださいまして、誠にお忙しいところを、有難うございます。

で、この私共の第一回の（今まで長月会はちょっと朝、ちょっと午前中ぐらい、新年賀詞交換会をやっておりましたけれども）、私たちのこの新しいニチメン社友会の初めての第一回の新年会でございますが、このような沢山の方々にご出席いただきまして、盛大に行なうことが出来ましたことは、誠に有り難く思っておる次第でございます。

丁度、我々の東京社友会の、今年は三年目に入るわけでありますが、ま、今までのところ、ご存知の通り、社友会にできるだけ多くのOBの皆さん方に少しでもプラスになるように、そして、いろんな新しい企画も増やして行って、大きく発展させなければいかんと、これも新しい企画の一つでありまして、今まで去年おととしにやっておりました社友会本来の事業計画、予算に従いまして、今後ともさらに内容を充実させまして新しい企画を行なって、皆さんのためにプラスに成る様な運営をしていかなければいかんと思っておりますので、引き続きよろしく御支援、ご指導の程をお願いしたいと思います。

ひとつ皆さまご存知だと思いますけれども、私達が一番過去におきまして御支援、ご指導いただいた双日さんのほうの業績もすばらしく立派に発展、向上しつつあるとのことでございましたが、先日ちょっとお話を伺ったところによりますと、今年の世界経済、日本経済は波乱含みの幕開けだということでございますが、そういう時は不安定で不透明で、我々商社にとって一番良い時だ、発展の時だ、と社長からもお話を聞きまして、非常にエンカレッジされたところであります。

一層、物心両方面のご支援をいただくことによりまして、幸いに大阪の方にも立派な大阪社友会が出来ておりますので、東西連携を深めまして、皆さんのために新しい発展をさせていただきたいと思っておる次第ですので、よろしくご指導のほど、お願い致したいと思っております。

あらためましてこのあと、長寿の表彰もあると聞いておりますので、末永いご多幸を、かつ、双日さんの末永い、これからの発展とご繁栄をお祈り致しまして、簡単でございますが、私のご挨拶といたします。

ご清聴ありがとうございました。

御　　挨　　拶

双日㈱会長　土　橋　昭　夫

皆さま、新年明けましておめでとうございます。

ちょうど一週間前の大阪社友会で、130人を超える先輩方に囲まれて、数多くの叱咤、激励を受けてまいりました。
本日も170名近い先輩諸氏がお集まりになられた席でご挨拶が出来ることを、大変嬉しく思っております。

昨年の社友会でも会社の状況をご報告申し上げましたが、現在、私どもは3ヵ年の中期経営計画「New Stage 2008」を進めており、今期は中計の2年目になります。
第1四半期が終わった昨年7月の段階で、今期の計画値を「ほぼ達成できると確信している」旨を申し上げましたが、現在のところ、中間決算時に上方修正した今期見通しの連結経常利益1,000億円、連結当期利益650億円についても、余程のことがない限り達成できると思っております。

合併時の2004年4月に数値目標とした経常利益1,000億円に、合併4年目で到達できる見通しであり、一時期の大変厳しく辛い状況のことを思い起こしますと、感慨もひとしおでございます。

このように当社の収益状況が順調であり、また課題でありました優先株式を昨年9月に一掃できたことより、外部の方からも、資本構造が再編されて資本の質も改善できた旨の評価を頂きました。
そして昨年の暮れには、格付機関のR&I社から我々が念願として目指していた投資適格のBBBの格付を取得できました。残すはS&P社の格付ですが、本年3月頃には商社セクターの見直しがあると聞いておりますので、BBBの格付が取れるのではなかろうかと今から胸を踊らせております。

もう一つの課題でありました当社のリスク管理面については、スタッフの充実や様々な管理手法の導入等により高度化を進めてまいりましたが、いつか来た道ということがないように、しっかりとリスク管理を充実してまいりたいと思います。

配当をして、優先株式を一掃して、投資適格の格付を取得するという3つの目標を掲げて、これを以って再建完了と位置付けておりましたので、この3月にS&P社のBBBの格付が取得できますと、新年度には再建完了宣言ができるのではなかろうかと思っています。

一方、このような好調な数字に浮かれることなく、また奢ることなく、リスク管理というブレーキをしっかりと効かせながら、大胆にまた積極的に攻めていきたいと思いますので、皆様方におかれましても、引き続きご支援ご声援をよろしくお願い申し上げます。

最後に、皆様方におかれましては、健康で明るく、良い年でありますことを心より祈念いたしまして、挨拶を締めさせていただきます。

なお、本日は都合の付く役員を多数出席させておりますので、ここでご紹介をさせて頂きます。
（加瀬社長、佐藤専務、鈴木専務、石原常務、市礒常務、此田執行役員、茂木執行役員、後藤執行役員、および岡﨑監査役の紹介）

双日㈱社長　加　瀬　　亨

只今ご紹介頂いた加瀬でございます。
皆様、新年明けましておめでとうございます。

先程、土橋会長の方から当社の状況につき、説明いたしましたが、今年は、この4月に再建完了宣言をして新しいステージに入り、経営基盤の強化は当然のことながら継続して参りますが、その上で成長を加速させるという戦略を考えており、私どもとしては、中期経営計画「New Stage 2008」の総仕上げの年であり、次の中期経営計画を練り上げる年と位置付けております。

昨今サブプライムの影響、あるいは日本の内需に関しましては、非常に厳しいものがあり、不透明な感じがございますが、海外に目を転じますと、新興国をはじめとして、米国経済だけに頼らずとも成長が続いている世界経済下では、逆に商社にとっては、皆様が活躍された60年代、70年代に、非常に近い環境であると感じており、私どもはアジア、中国、そして中東・アフリカ、中南米といった地域で、事業機会が増えてきておりますので、これをもって我々の成長基盤をさらに強めて行きたいと考えております。

私ども現役のみならず、先輩の方々に誇れる双日を土橋会長とともに作って行きたいと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。

双日・土橋会長(右)、加瀬社長(左)

新年賀詞交換会、盛況裡に開催される

ー ご協力の皆様に感謝 ー

高　木　亨　一

不肖高木、何のかんばせありてか、2006年、社友会世話人となってより、第一回、第二回と連続して、総会・懇親会準備の総括責任者の任にあたり、如水会館、鉄鋼会館と無事こなすことが出来た。

ところが昨年9月の世話人会にて、新たに2008新年賀詞交換会開催が決まった。
会場に双日・会議室を使用することも決まり、今までの如く、宴会場任せの準備ではなく、何から何まで自分達でやらねばならない。将に手作りの新年会となった。

OBの、OBによる、OBの為の社友会を標榜してきたが、この際、世話人全員参加を呼びかけ、12月5日の世話人会で役割分担はじめ詳細ACTION PLANを練った。

双日会議室使用実績のある日商岩井社友会に、ケータリング会社の紹介をはじめ双日・関連部門との手続き関係も教えていただいた。
日岩側の細野さんはじめ事務局の横山嬢には大変お世話になりました。
本件折衝担当の塚本、花澤両世話人、ご苦労様でした。

準備万端整い、当日を迎えたものの、なにせ老齢のOBの皆様をお迎えするにあたっての配慮を必要とし、地下鉄出口より会場までのご案内役に若手OBのご協力を頂いた。厳寒のなか案内板を持つ手も凍えたことでしょう。
湯浅荘三郎、久世清、南部捷郎、今村隆夫のみなさんには感謝、感謝です。

一方、大山世話人率いる受付班、石川、浜口両世話人も準備段階から色々ご苦労があったと思いますが、
当日、予想の150名を超える出席者を効率よくさばかれ大した混乱もなく捌かれたことお見事です。

高田秀子世話人率いる美女軍団も受付・クローク・老齢者介助に大活躍をされました。
小堀祐子さん、高山和恵さん、滑川和子さん、に感謝！来年もよろしく。

当日、入会受付を担当した沖本会計担当世話人は、ニチメン出身の双日㈱執行役員6名を勧誘し,総勢14名の新規加入者を獲得したこと、殊勲功である。

尚、最後になりましたが、双日シェアードサービス㈱青木さんには終始一貫万端にわたりご協力頂きました。
この場をかりて謝意を表します。

総会・懇親会は倉又世話人代表の司会進行で滞りなく進み、やがて河西良治副会長の中締めのスピーチに至る。
いつもながらの格調の高い話で、内外の経済を俯瞰して、含蓄のあるスピーチでした。
就中、激動する世界、身の回りの出来事に対応するには、常に Imagination と Innovation を以ってすれば、成功が導かれるとのこと。

われら社友会も、この Imagination and Innovation で以って、更なる発展を遂げたいものです。

最後に再度上記ご協力者に感謝しつつ、擱筆といたします。

＊1月18日　ご出席の皆様　次頁の通りです。

賀詞交換会　出席者名

（＊印　非会員）

［来　賓］

土橋昭夫
加瀬豊
佐藤洋二
松木幸夫
山崎元嗣
西村俊郎
稲田隆
神保一也
岡崎謙二
鈴木譲治
石原啓資
市礒正夫
茂木良夫
後藤政郎
此田哲也

［長寿表彰者］

柿本寅之介
土橋久男
山口良孝

［一般会員その他］

青木聡弥
東信子
荒木武雄
新崎盛晨
幾島清
池田格
池本俊通
石原清
泉伸夫
糸井康雄
今田時男
入江隆史
入野英次
岩居宏一
岩橋宣之
大塚静子
大西勇
大野久生
大場禎治
大羽陽一郎
大平栗雄
大森啓作
岡島岩男
小川宇士雄
奥村睦夫
小野賢次
勝田泰司
鎌田亮三
上條達雄
神谷勤
唐崎和彦
菊池省三
喜多嶋雄徳
北村俊夫
木下龍三
木村次朗
越野量路
小林靖幸
小林斉之介
斉藤至弘
坂井良司
笹原弘
佐藤悦三
佐藤三朗
佐藤統次
佐藤守男
澤井修次郎
三分一克美
柴田豊
篠塚美郷
渋谷義
島崎京一
白石哲也
新藤喜与次
真保博一
杉本佳久
祐定郁夫
菅生宏一
鈴木春美
須藤忠昭
住吉哈爾雄
陶山晃
瀬川正裕＊
関根潤治
大工原正徳
高木恒久
高瀬允宏
高瀬善男
高野泰雄
高松宗信
田所忠彦
田中聡太郎
田中久彦
田畑実
田村昌久
利根川慎治
土橋勇
豊木啓喜
豊間根政行
中川十郎
中村吉夫
名島憲一郎
並木正
成見和男
西川周
西川洋
西田昇
西村昭男
西村弘
庭野松三
橋爪覚
羽島昭一
蓮沼恒郎
花崎俊雄
埴生栄勇
林義人
半林亨
久澤克己
日原東洋
平石豊
平尾龍介
広岡幹雄
廣田孝夫
深尾孝
福島有恒
福富直明
福本匡純
藤野泰三
星合良彦
星加恭
堀田恒雄
堀部義数
本田務
本間登志雄
前田征雄
牧洋生
桝潟磐夫
松尾憲一
丸山泰三
三浦甲蔵
水野英幸
水堀勤
溝江博三
宮浦博
宮田信雄
村井靖武
村尾毅
村澤醇治
安武国章
安本裕子
柳沢明
矢吹敦司
山岸正雄
山口富治
山口冨美子
山邑陽一
山本浩一郎
吉海秀造
吉川秀夫
吉田敬三
吉野昭一
吉水稔
吉村文夫
立古健策

［役員・世話人・監事］

河西郁夫
丸山修作
岩田昭二
河西良治
廣田雄太郎
石川博保
大山弘雄
沖本達也
倉又則夫
倉持次雄
栗田久彌
高木亨一
塚本幸雄
西村照男
長谷川洋
橋本春彦
花澤和郎
浜口信恭

協　力　者

高田秀子
滑川和子
小堀裕子＊
高山和恵＊

久世清司
今村隆夫
南部捷郎
湯浅荘三郎

（敬称略）

（合計　188名）

社友会総会・懇親会開催のお知らせ

下記の如く、総会・懇親会を開催いたしますので万障お繰り合わせの上ご参加くださるよう御願いいたします。

日　　時；2008年7月22日（火曜日）12：00～（11；30開場）

会　　場；『如水会館』（2006年と同一会場です。）
東京都千代田区一ッ橋2－1－1
電話；03－3262－0111

アクセス；地下鉄・東西線・竹橋駅または都営三田線・神保町駅A 9出口

会　　費：当日会費@3,000　受付にてお支払下さい。
（本来当日会費は@7,000円ですが、社友会より補助金として@4,000円が捻出されます。）

出欠確認；“会報No. 4”に返信用ハガキを同封いたしましたので、5月25日までにご返答下さい。

その他のお問合せ；会報に掲載の役員世話人連絡先の誰でも結構ですからご連絡下さい。

《御願い》“年会費の支払方法”については下記の方法でお支払御願いいたします。

2008年度ニチメン東京社友会年会費支払いについて

2008年度の年会費（3,000円）の支払方法に関しましては、下記の3通りから選んで下さい。

1）7月22日(火)開催予定の社友会総会・懇親会での現金による支払い。

2）従来同様、銀行振り込み：三菱東京UFJ銀行・東京営業部
普通口座：8225155
口座名義：ニチメン東京社友会　代表倉又則夫
尚、銀行振り込みの場合の振込手数料は振込人の負担にてお願いします。

3）郵貯銀行にての振込：同封の払込取扱票をお近くの郵便局の窓口に現金と共に提出頂ければ結構です。
振込先は：口座番号：00100－4－318041
口座名義：ニチメン東京社友会
この場合、ご依頼人欄に住所・氏名を明記願います。
尚、手数料は振込人の負担にてお願いします。窓口にての支払いの場合は120円の手数料がかかりますが、ATMご利用の場合の手数料は80円です。
上記払い込みはコンビにでは扱っておりません。

春　日　雑　感

丸　山　修　作

春の息吹きを感じ街に出た。昔懐しい神田駅で降り室町の砂場に向う。昔は砂場は江戸通りのニチメン（当時は日綿実業）東京支店が入っていた近三ビルの直ぐ隣に店を構えていた。
現在は近三ビルの裏に移転している。近三ビルの隣にあった頃は自分の金でそこの蕎麦を食べたことはない。日綿に入社し上司に連れて行って貰って始めて砂場の蕎麦なるものを食べた。
普通の蕎麦と違い色が白く実に美味であったと記憶している。値段も高い。今でも高い。然し美味しい。
室町砂場は明治二年創業と聞く。ニチメンより何と二十三年も前に創立されていたのだ。
今でも盛況を極めている。

普通の蕎麦に比べて相当高価なのに美味というだけで伝統を保ち繁栄を続けているのはどう云う訳か。
現在の立派な店構えも隣に位置していた日綿実業が相当の貢献をした事は間違いなかろう。
その日綿実業は今はなく、砂場は依然として営業を続ける。
そんな事はどこにでもある事だろうが何か腑に落ちない気持で蕎麦を食べ終えた。

近三ビルの正面玄関に廻って見た。私が入社した五十八年前と変らず黒ずんだ茶褐色のタイル張りの古色蒼然としたビルだ。始めてこの玄関の前に立ったのは昭和二十五年十月であった。
補欠入社を許可するとの電報を受取りやって来た。そこに居たのが秋山三千夫君だった。
私と大学同期、海軍は私の一年後輩の好青年だった。「お前も補欠か。」「そうだ。お前もか。」と交した言葉を今も忘れない。後年役員になった。既に故人になって仕舞ったが水戸生れの熱血漢だった。

その年朝鮮戦争が勃発していたが特需景気で日本経済が急速に浮揚するのは翌年からで我々が入社した年は依然就職難であった。二人は身体検査で落ちる懸念は皆無。早速入社した。間もなく日綿実業は輸出入取扱高で他社を凌いでトップに躍り出た。財閥系が未だ解体中であった事も幸いしたが秋山と二人で良い会社に入ったなと喜んでいたに違いない。よく働いた。楽しい事も多かった。先輩の一人とさぼって日本橋の白木屋（今のコレド）の地下のニュース劇場でニュース映画を見ていて帰り際に入口で上司の三宅孝雄部長にぶつかった。思わず「同罪ですね。」と言ったら「この野郎、早く帰れ」と怒鳴られた。
すっ飛んで近三ビルに戻った。後年三宅部長は私の結婚式の仲人を引受けてくれた。

踵を返して赤坂に向った。TBSの巨大なビルが完成していた。そのビルに圧倒される中、周りに配置された建物との見事な迄のバランスの美は都民のいこいの場オアシスとして末長く都民に親しまれよう。
TBSビルの周辺に植えられた桜は二分咲きだった。「赤坂サカス」と称せられるが、その願いは桜の花を咲かすこともあろうが、この周辺に集う若い人達の夢を一杯に咲かす機動力となることであろう。
赤坂サカスの広場から颯爽として屹立する双日のビルが見える。

そこに働く多くの若い社員が自分の夢を双日の限りなき発展にかけてくれたらと思う。
近三ビルの周辺の景観と一八〇度変わる場所に立ち時代の変った事を痛感する。
近三ビルの古い話などに興味を持つ社友会の会員は今や数少ない。

然し近三ビルに懐しさを感ずる人が少しでも居る間は力不足乍ら出来るだけ長く会長職に留まろう。
そして同時に赤坂サカスの新しい世代に斉らす時代の波に少しでも馴染めるよう努めたいと思う。

2008年3月30日

欧州ニチメンの変遷

河　西　良　治

私はロンドンに計三回、８年勤務した、欧州でロンドン以外ではミラノ（２年）、パリ（7年）である。
何と言っても印象が強く残っているのは、ロンドン最後且つ引退直前の1995年初め、欧阿中東統括役員当時、念願の欧州組織の大再編成稟議を通した事だ。
即ちそれまではロンドン、デュツセル、ミラノ、マドリッドには各々独立法人が存在し決算も各店が別々に行っていた。

これは当時、急速に発展中のＥＵの流れの中にあって甚だ時代遅れであり総合戦略的にも税務対策上も好しい状況ではなかった。
これら欧州各法人を世界金融の中心であるロンドン在で資本金も厚い（更に厚くする）英国法人の支店に変更し、同時に営業部門制度を導入すると言う大胆なものだった。
然し大正13年に設立したMENKWA GESELLSCHAFT m.b. Hの輝かしい伝統を誇るDD店等の存在もあり,この機構大改革には本社にも反対意見もあったものの統括役員席、欧州各店長、そして本社業務本部等の強力なバックアップを得て無事に稟議を通す事が出来た。

結果としてNICHIMEN EUROPE plc.　が生まれ、ロンドン本店、デュッセルドルフ支店、ミラノ支店、パリ支店、マドリッド支店が誕生したのである。
この支店制度は爾後同業他社も取り入れる所となりニチメンがその魁となった事は誇らしい事である。

従って双日になってからもこの制度は継続されており、さらに喜ばしい事には、今の時点を取ればニチメン・フランス出身の中島和彦君がここ一年来、執行役員欧州・ロシヤNIS総支配人として大活躍しており、年間二桁億円の利益を計上している事だ。欧州は正にニチメンの流れで事が進んでいる訳でありこれも歴代駐在員一人一人の汗と涙の結晶の結果であり革めて心より感謝申し上げる次第である。

さて、仕事の話はこの位にして、商社員として各自若い頃の強烈な思い出は各々持って居る筈である。

私は1957年に初めての海外勤務地ロンドンに赴任した当時の記憶が終生忘れられない、その内の幾つかを書いて見たい。

私は東京で米軍の猛爆撃に会い、九死に一生を得たものの、食べる物も儘ならず殺伐とした戦後の日本を後に1957年５月,Swiss Airのプロペラ機で三日掛かりでロンドンに到着した。

ハイド・パーク、リージェント・パーク等の美しさを目の当たりにした時の驚きは正にこの世の物とは思えない程の衝撃であった。
然し住み始めて次第に周りが見えて来ると驚く事の連続であった。

⑴　FIRST SHOCK ！！！！
到着して早速“EVENING STANDARD”の広告を頼りに下宿探しに出掛けた、郊外の家に辿りつきDOORをノックしたらおばさんが出てきて私の頭の先から足元までをジロリと一瞥した上で、
“YES I HAVE A ROOM BUT NOT FOR YOU !!!!
と言われバッチとドアーを閉められた。

これには早々の大ショックで一生そのおばさんの顔を忘れる事は出来ない、人種差別の厳しさを痛感させられた。

⑵　パブ

当時のパブには入り口が2つあり“SALOON”と“BAR”と書いてあった、パブの中も仕切りで二つに分かれていた。

私はどちらから入るべきか躊躇して英国人に尋ねた事があるが、勿論SALOONですよと言われてほっとした事を覚えている。

当時SALOONではONE PINTのビッターが1シリング6ペンスであったがBARではそれがHALF PENNY即ち何銭単位の安さだけだった、即ち形式的な値差を付ける事によって階級社会を分けるシステムなる事を知って愕然とし、革めて日本人に生まれて良かったと心より思った次第である、何時からこの2つの入り口の差別が消え、パブの中の仕切りが無くなったのかは覚えて居ないが、当時階級社会の残滓をまざまざと見る思いがして同情を禁じ得なかったし再び日本人として生まれて本当に良かったと思った。

⑶　ロンドンの霧

私の年代の中学の英語のリーダーにロンドンの“PEA　SOUP　FOG”なる表現があったのをご記憶の向きが多いと思う。

これを実地に体験して成る程、グリーン・ピーのスープの色だと納得したものだった。

当時、各家庭ではMIDLAND産の低質の褐炭を燃料として用い、その上にロンドンのど最中のバタシー・パークには巨大な石炭火力発電所がもくもくと黒煙を上げていた、冬と共にFOGが到来し、これらの煙と渾然一体となって“SMOG”となりロンドンをすっぽりCOVERして仕舞うのである。

この“SMOG”は家の中まで侵入し呼吸も苦しい程で老人も越冬が大変であった、その酷さは言い表せない程のもので一メートル先が見えず何度か夜、帰宅時に致し方なく車を路肩に置いたまま手探りで歩いて帰ったことを覚えて居る。（勿論今は全くの様変わりでテームス川には魚が悠々と泳いでいる）

⑷　ガス灯

皆様の中にどれだけの方が現在でも議事堂、バッキンガム宮殿周辺に1400基のガス灯が毎日点滅して居るのをご存知だろうか。

私が初めてロンドンで生活を開始した1957年頃には霧が舞い降りて来る冬の夕暮れ時になると、何処からとも無く長い竿を担いで自転車に乗った男が霧の中に現れ、巷のガス灯に次次と火を入れて歩く風情は何とも言えないロマンテイックな感傷を誘われるものであった。

これらのガス灯には1950年代よりガス　パイプ　ラインで石炭ガスが供給されていたが現在は北海のガス田よりのガスによって取って変わられている由でガス灯の点滅も自動化され、昔の風情がいまや見られないのは残念である。

以上勝手な事を書き且つ興味をお感じにならない向きも多いとは思うが、冒頭に言った様に若かりし私なりに心に強く残った事を記させて戴いただけなのでご容赦をお願いする、勿論、現在の英国は当時とは打って変わった住みやすい超一流国に変貌を遂げて居る事は言を俟たない。

最近のフランス事情

廣　岡　幹　雄

今から45年も前、パリ勤務を命じられた時には、まさかその後二度にわたり通算15年の駐在を経て、現役期間中ほぼ途切れることなく、フランスとの係わり合いが続くとは予想もしなかった。

今更永住する気力はないものの、幸い知己にも恵まれ、機会を見つけては出掛けて、永い付き合いとなった土地柄である。最近の話題を思いつくままご紹介したい。

1）サルコジ大統領のこと

二期12年の任期満了のシラック氏（75才）に続き、第五共和国6代目の大統領として、積極改革路線を鮮明に打ち出し、53才の若さでサルコジ氏が華々しく登場して、早や10ヶ月経った。

「サルコ」の愛称で、良くも悪くもこれだけ話題に上る人物は、いくら政治好きのフランスでも珍しい。

前歴の内相時代、強硬な治安対策で犯罪発生件数の激減を計り、大統領になるや組閣にあたっては、国会議員では有色人種皆無のフランスで黒人女性を、また政敵の社会党からも閣僚を登用し、自らの地盤の新保守派を中心に、中道まで幅広い布陣で臨み、強烈な個性とリーダーシップに6割を越す支持率を背景に、国民の期待を集めた。

ところがご他聞に洩れず、公務員制度・移民問題・労働条件などの改革は、思うように進まず、2番目の夫人との離婚からイタリアの富裕トップモデル（40才）との電撃再婚や、頻発する舌禍騒動が、11年振りに3％を超える消費者物価上昇などの重要問題よりも、マスメディアに取沙汰される始末で、支持率も3割程度に急落している。

最近の統一地方選挙では、そんな影響もあってか、左派の躍進を許し、サルコジ政権は苦境に立っている。ただ日本と違って、メディアの自浄作用の動きもあり、ご本人は相変わらず意気軒昂。

世界が注目する洞爺湖サミットでは、気候温暖化・アフリカ問題・人権擁護などで、同氏の持論展開とパーフォーマンスが見ものである。

2）パリ市の交通渋滞緩和と排ガス対策

1．VELIB（セルフサービス自転車）

昨年夏よりパリ市内で、ほぼ300Mごとに特徴ある駐輪場が見られ、同じ形の乗り心地の良さそうな自転車を利用する市民が増えている。市内への乗用車乗り入れ削減を目指して、自転車専用レーンを整備し、市当局が民間業者と組んで始めた、安直に乗り捨て自由の貸し自転車システムである。

1日・1週間・1年夫々利用者の希望の単位で基本加入すれば、一寸市内を移動して30分以内に返還する限り何回利用しても無料、あとは半時間単位でその都度追加料金を払う方式になっている。

基本加入料は自賠保険付で1週間800円、年間で5000円弱と格安である。

この動きはフランス地方都市から周辺国の主要都市にも広がりつつあり、欧米の業者が入り乱れて参入して、欧州ではパリ以外にも、オスロー・ストックフォルム・バルセロナ等でも増大しつつあるとのこと。

2．TRAMWAY―T3（路面電車）

世界中の大都市で19世紀の後半から、市民の主要交通手段は路面電車であったが、自動車の登場と共に消滅の一途を辿った。パリ市でも1932年には地上から姿を消したとのこと。

ところが、最近新しいスタイルで復活して話題を集めている。

交通渋滞の深刻な内環状線で運行されていたバス路線を廃止し、地下鉄の高効率とバスの利便性を兼ね備えた、低床式でバリヤーフリーの新式大型路面電車が現れた。

2006年末にスタートしたばかりで、未だ全長8KMとパリ20区の内3区をカバーするだけだが、早朝

から深夜までピーク時は4分間隔で運行し、毎日10万人の定期的乗客を運び、創業以来既に延べ2500万人が利用し、その区間の自動車交通量を25％も削減した報道されている。

この成功に力を得て市交通当局は、いずれパリ市一周を実現するべく計画推進中である。

環状線の中央レーンを緑地にして、その上を路面電車が運行しているが、両側の自動車レーンの様な交通信号の影響もなく、視界の広い窓から周辺の景色を見ながら実に快適である。

路線の周辺が住環境改善したとして再評価され、商店なども復帰して来つつあるようだ。

3）ミシュラン・ガイド（東京は世界一のグルメ都市？）

赤い表紙の“ミシュラン・ガイド”は、1900年フランスのタイヤメーカーが、将来のモータリゼーションを期して、レストランとホテル案内のため、ドライバーに無料で提供した案内書に端を発し、今や欧米の主要都市版が発行され、グルメガイドとして各地で重用される存在である。

昨年11月、アジアでは初めて「東京2008年版」が出版され、即日完売となりメディアの過熱もあり話題となった。

2人の日本人と3人の欧州人が覆面で1年半かけて1500軒のレストランを調査したと称されている。

3つ星の評価が8軒（フレンチ3、伝統的日本料理3、すし屋2）、以下2つ星25軒（和食16、フレンチ6、イタリア・スペイン・中華各1）、1つ星117軒が写真入りで紹介されている。

本家のフランス版は、星付きレストランのみならず、お値打ちレストランや、いろんな選択基準本位の店紹介など、長年の実績に基づく多彩で使い勝手の良い内容になっている。

一方東京版は初年度でもあり格付け志向が過ぎて、しかも和食は知名度高い名店重視、洋食はフランス系レストラン偏重となり、業界や専門家の間では結構反発が多く見られた。

面白いことに、海外の反響は意外に冷静で、東京の獲得星数合計191は、パリの倍／ニューヨークの3倍で、グローバル都市東京は世界一の美食の首都と、英国BBCは報道している。

ニューヨークタイムズは、東京首都圏は3千万の人口に16万軒のレストランがあり、150軒が星を獲得しても当然とのミシュランの説明を引用している。

その後東京では、3つ星になった日系フランスレストランは、予約が2ヶ月先までとれない、和食の有名料亭で客筋層に変化が現れた、すし屋の中には電話が繋がらない所も出て来た　などの現象が起こり、たかが一介のガイドブックでは済まされないような影響が出ている。

3月初旬「パリ2008年版」が出版されたが、3つ星9軒／2つ星15／1つ星39合計たった63軒で、星の獲得総数96と相変わらず激戦だが、和食ブームで日本料理店が始めて1つ星格獲得し注目されている。

4）エアバス近況

最後は矢張り本件で締めくくることにしたい。

エアバスが社運を掛けて最新技術を結集して開発してきた、次世代超大型機A380の初号機が昨年10月シンガポール航空に引渡しが完了し、航空機史上の新たな幕開けとなった。

総2階建て500人以上の乗客を、15,000キロ以上の航続距離で輸送する4発長距離機である。仏・独・英国は勿論、中国・韓国を含むアジア諸国、大洋州の航空各社も同型機を200機近く発注済で、来る5月のシンガポールよりの初就航を手始めに、日本の空にも飛来する日が近付いている。

エアバス社も以前の仏独他の国策会社から変貌し、今や欧州を代表する航空宇宙企業EADSの100％出資会社となり、米国・中国・中東などに続き日本も現地法人化し、スタッフも強化されている。

エアバス・ジャパンの現社長は、1985年頃US通商代表部長として日米貿易摩擦の最前線で活躍し、その後世界企業の日本法人社長を歴任された、日系3世のグレン・フクシマ氏であるのも数奇な運命である。

日本の航空大手2社は、いずれも中期経営計画では機材のダウンサイジング化を推進中で、ジャンボ機を順次退役させて、主力機としてボーイングの中型双発長距離新鋭機導入の方向にある。

最近フクシマ氏とお会いする機会があったが、いずれ日本もA380を必要とする時が来るだろうと、力強く語っておられたのが印象的であった。

デュッセルドルフの想い出
ー「ニチメン・デュッセルドルフ会」の発足によせてー

坂　井　啓　治

『なじかは知らねど心侘びて……』ローレライを詠った詩人ハイネの生地デュッセルドルフにドイツ・ニチメン（DD）事務所が開かれたのは1960年。来年は開設50年目に当たるわけだ。この記念すべき時を前に関西地区では柳沢清充君〔DD駐在1982～86〕ほか、関東地区では福本君〔同‘70～77/80～86〕らのご尽力により『ニチメン・デュッセルドルフ会（仮称）』が発足した。昨暮12月8日鉄鋼会館（東京・日本橋）に大阪からも7名が上京され、計30余名のDD駐在OB諸兄が集い旧交を温め近況を語りあった。

（写 真）
右端　中村昌義　初代所長
　　在任　1960～62
中央　諸橋良吉　元支配人
　　在任　1963～65
左端　筆者　元支配人
　　在任　1985～89

この日は懇親会に先立ち、デュッセルドルフ（DD）に駐在された　苅谷・大石・岸田・桐原・鈴木（敏）さん他12名の物故先輩後輩諸兄に対し、出席者による黙祷がおこなわれた。ご出席の最長老である諸橋良吉さん（81）及び初代所長の中村昌義さん（80）から略半世紀昔の想い出が縷々ご披露され、またDD駐在OBでもある現役の鈴木譲治専務執行役員から双日（株）の現況・展望が力強く語られた。

来年はニチメン・デュッセルドルフ開所50年目

「ニチメン百年史」によれば1921年ドイツ綿花会社（有）がBremenに発足、同年Hamburg支店が設置され、（1959年ドイツ・ニチメンと改称）1960年その分身としてDeutsche Nichimen GmbH Buero Duesseldorfが開設された。1971年には『ドイツ・ニチメン創立50周年記念』式典がハンブルグで盛大に行われ、記念誌発行に小生も参画した記憶はまだ新しい。

DDオフィスは3回移転

小生は、DD店が設置された1960年まずハンブルグ店へ、その後開所に少し遅れてデュッセルドルフに赴任した。DD店最初のオフィスはKlosterstr.22だった。次いでImmermannstr.15で、いずれも鉄鋼部門で活躍されていた中村所長の顔で当時の八幡製鉄駐在事務所のあとを借りることが出来たのである。その後駐在員および現地スタッフも増えImmermannstr.13へ。しかし規模を縮小せざるを得ない採算状況となり駐在員を含めた陣容の削減と事務所フロアーの半減が断行されたつらい想い出がある。（小生の）2回目の赴任時には商い・陣容とも大きくなり広い事務所が必要となったので、現地スタッフと共に「オフィス移転計画チーム」をつくり約1年間検討を重ね、現在のWehrhahn Center（現在の双日DD店のある）に移転した。

デュッセルドルフいま昔

近年日本の新聞紙上で「デュッセルドルフ発」の文字がしばしば見られ、『日系企業の欧州拠点としての機能』があるといわれるデュッセルドルフ（人口約65万人）は、現在日系企業数は約450社、ビジネス関連在留邦人は7,000人弱を抱え，ドイツ人は“Japanische Kolonie（日本の植民地）”と皮肉をこめ言っているが、開所当時の在留邦人は200名程度であった。そのころEEC（欧州経済共同体＝現EUの前身）に湧く

日本の政済界のお歴々が来られ「ご飯を食べたい」といわれるとご案内できたのは、（東京オリンピックの1964年に『ドイツ日本館』が出来るまで）デュッセルドルフに3軒しかなかった中華料理店であり、本社の取引先から来独された方々には拙宅で、日本料理まがいのお食事を差し上げるのが精一杯であった。

1960-70年代は、市場視察や技術導入のため多くの取引先からいろんな業種の会社幹部の方々が来独され、3～11月ごろまでは文字通り「月月火水木金金」であった。日本からの来客のない日は一日も無かった。空港への送迎は週に10回はくだらなかった。その来客が一日に5～6組の時は、仕事に差し支えない会社同士を組み合わせ二人事務所（中村所長と小生）ゆえに手分けして会食に誘ったことも何度かあった。接客で多忙を極めても直ぐ商いに結びつかず月々の業績には表れない　と言う苦しい日々だったが種まき期と思い、また個人的にはアテンドした（日本では中々お目にかかれない）方がたから多くを学び、育てて頂いたと忘れ得ぬ良い経験だった。　【手に触るは一期一会の落花かな】

日本人会ソフトボール大会に優勝

しかし楽しい思い出もある。2回目の赴任中、日本人会の恒例ソフトボール大会で篠塚郷美君（化工担当）率いるニチメンチームの優勝だった。大会前の数週間は、日の永い夏の夕暮れからラインの河原で猛練習に励んだ結果、数十社のチームとのトーナメントを勝ち抜いてきたのである。表彰式の後は全駐在員とその家族が支配人社宅の庭でバーベキュー祝賀パーティで打ち上げた。またクリスマス・パーティは現地スタッフが中心に計画し、DD店に常駐される日本のメーカー駐在員も一緒に年に一度ビールとダンスで深夜まで過ごす習慣ができたことも思い出される。その主役Frau Renate Schroeder（支配人秘書を長年務めている）は小生が1回目の赴任時に化工部門で採用して以来40年以上DD店に勤務していることになる

デュッセルドルフは第二の故郷

DDに駐在された諸兄はもとより、多くの出張者はアルトシュタット（旧市街）で“Duessel, noch einmal!”とほろ苦い味のアルトビールのお代りを楽しみ、“Eisbein mit Sauerkraut”（豚足と酢キャベツ）を、また寒い夜はCsikosでの“Gulasch Suppe”（ハンガリー・シチュー）と表皮が硬くて味のある“Broetchen”の味を楽しまれたことだろう。“Gluehwein”（熱い赤ワイン）を飲みながらDDの銀座通りと言われるKoenigsalleeで見るカーニバルは今年も終わった。小生にとり通算16年10ヶ月間、ニチメン在籍の半分近くを過ごした長いようで短かった、苦しくも有意義だったDDでの生活が走馬灯のように思い起こされ話は尽きない。在欧経験を生かして現在いくつかの大学で「EU（欧州連合）での企業実務」を中心に講師をしている関係で毎年のように欧州にでかけるが、その時はドイツの旧知家族を訪れ昔日を語り、或いは故人のお墓参りをすることにしている。数年前久しぶりに愚妻とデュッセルドルフから30分ほどのところにあるケルン大聖堂を訪れた。来独客を何十回かアテンドして見たものとは全く違ったものにみえた。在独中に3人の子供に恵まれたが、私たち家族にとってデュッセルドルフは忘れえぬ第二の故郷である。

【聖堂の　窓閉ざされて　月おぼろ】

デュッセル地元の代表的なアルト・ビール（右）
ブローッチェン/ソーセージ（中）と練りからし（左）

ライン河畔に天をつく代表的なゴチック建築
ケルン大聖堂（13－19世紀建立）

ベルリンの壁を形骸化したハンガリーの穴

山　田　寛　治

私は1986年から89年迄ウイーンに駐在しました。その後、経団連の投資会社、日本国際協力機構で働いている時、1995年から97年迄、2年半ブダペストに住み、その間オフイスビルを建設する為の会社設立、資金集め、建設工事の監督、入居者を募集してビル会社の経営を安定させるところまでやって、引退しました。ヨーロッパ屈指の観光都市、ウイーン、ブダペストで計6年弱暮らした事になります。

私は今73歳です。86年に初めてウイーンに赴任したとき、51歳でしたから、今から考えると未だ若かったのですが、辞令をもらって、20年以上やった中東むけのプラント商いを突如打ち切り、ウイーンに着いたときは、あまりの環境の変化に戸惑いました。

11月のウイーンは曇り空で、雪が降ったり止んだりの天気でした。毎朝、窓を開けて外を見ると雪が舞っている。1週間程すると段々気温が下がって来た。結局マイナス20Cまで下がった。私の今まで居たサウジやアブダビは暑くて明るかったので、このような寒さは経験したことがありません。たまの天気のよい朝、バイオリンを弾くモーツアルトの銅像が建つシュタットパークを散歩すると、木々が全て樹氷となり、朝日にキラキラと輝いていました。

出張しようとして社有車のメルセデスに乗って社宅を出たはいいが、すぐの坂を下りたらブレーキが利かなくなり、車を傷つけたのもこのときです。

冬、ウイーンの人たちには3っつの楽しみがあります。仮装想舞踏会、オペラ、スキーです。

仮装舞踏会ではワルツを中世から伝わるステップで踊ります。映画で見る、あれです。私はこれは苦手で招待されても、見るだけで踊ったことはありません。私はチビ、デブ、ハゲなので、大柄なオーストリヤの男女と組むと、全く異質で滑稽な姿となるからです。

オペラとスキーは楽しませて貰いました。スキーには週末、日帰りでよく行きました。往復のバス、リフト券付で3千円位でした。オペラも5000円ほど出すと中ほどのよい席が取れました。

だんだん暖かくなってきたのを感じたある日、ウイーンは嘘のように突然変身した。正体をあらわし、比べようのない美しさをあらわしたのです。美しい青葉の香りと光につつまれた中世そのままの建物は、私を感動させた。観光客も姿を見せ、ケーキとウイーナーコーヒーを呑んでいます。人気の的は、ザッハーホテル、デメル、ラントマンです。何れも中世から続く店です。

そういえば、デメルの当時のオーナーは政財界をゆるがす保険詐欺事件を起こしたとんでもない人でした。原子力発電設備を購入し、輸送中、船が沈んだと称して多額の保険金を受け取ろうとしたのですが、メーカーも、船もあやふやで、沈んだのも確認できないし、どこに建設するのかもはっきりしない。当時の内務大臣が保険金支払いを援助したとして、辞任したと記憶します。ヘル・デメルは逮捕直前に国外に逃亡し、つかまらなかった。これも上層部からの情報もれによるものでした。ずいぶんたってから、ウイーン空港で逮捕されたのは密告によるもので、かれは髭をはやし、変装していた。

私が居た頃、オーストリヤは3方をソ連衛星国に囲まれていた。北はチェッコスロバキヤ、東はハンガリー、南はユーゴスラビアで、昔、ハプスブルグ帝国に属したこれらの国々は美しい自然にめぐまれているが、当時ソ連の支配のもとで苦しんでいた。支配者ソ連もモラルが低下し、ゴルバチョフが改革を叫んでいたが、衛星国はそれ以上のどん底で疲弊しきり、貧乏していた。ハンガリーは状況改善のため、オーストリアとの交流を以前の状態に戻そうとして、1989年春、国境のバブワイヤーを突如撤去した。鉄のカーテンに穴をあけたのである。そのとき、私はその次に起こる驚くべき事態を全く予想できなかった。東ドイツの政府は労働力の西えの移動を厳しく制限していたため、若者は西ドイツに働きに行くことが出来なかったが、穴が明

いたので、そこを通って、出国すべく東独の若者達が国境のハンガリーの街ショプロンに集まってきた。最初は検問所から離れた所で国境を越えたり、国境の大湖、ノイジードラゼーを泳いで渡ったりしていたが、ハンガリーの検問所が自由に通過させたため、そのうちに人数が増え、毎日１万人を超える東独の若者がチェッコ、ハンガリー経由でオーストリアに入国したのである。彼らは東独製の乗用車トライデントに大勢の相乗りで来て、ショプロンの街で車を乗り捨てにして国境に行った。オーストリアの政府は、彼らを特別列車に乗せ、次々と西ドイツに送り込んだ。西ドイツ政府は、彼らに金を与え、住むところを世話し、職を与え、暖かく迎えた。東独政府は、ベルリンの壁、ウヲッチタワー、検問所を維持する理由を失ったため、それらを放棄し、東西ベルリンの往来を自由にした。長い冬が去り、春が来るように、突如、衛星国の人々は、ソ連から解放されたのである。ベルリンの壁を壊したのは、そのあとであって、既に取り締まる官憲はおらず、往来は自由になっていた。

西ドイツの当時の総理大臣ヘルムート・コールは、ミュンヘンに近いオーストリアの湖沼地帯ザルツカンマーグートで毎年夏休みを過ごし、新聞記者に放言するのが常であったが、私が深い感動をもって、今でも忘れない言葉がある。

“　ドイツ民族は第一次、第二次大戦に敗れ、ちりじりばらばらとなった。然しながら、神の助けにより西ドイツはEUでイニシャチブを執ることが出来るようになった。グレート・ジャーマンの思想はヨーロッパの隣人達に受け入れられなかったけれども、今、我々がEUの場で一緒になるのを、隣人たちは受け入れてくれるであろう。私はオーストリアのEUえの参加を支援すると共に、将来、ドイツ民族の住む他の国々がEUに参加することを支援する。”

現在、旧ハプスブルグ帝国の諸地域は、ほぼすべてEUえの参加を果たし、躍進しつつある。残る数カ国も数年後に参加することが確定的である。グレートジャーマンの思想は、ヒットラーが死んでも、ヘルムートコールを始めとする多数のドイツ民族の人々の心の奥に潜んでおり、今、EUの舞台で実現しつつある。

次に、私の最後のプロジェクト、ブダペストのオフイスビル（セントラル・ビジネス・センター、略してCBC）について簡単に御紹介します。

私が日本国際協力機構に出向中、ハンガリーの市場経済の発展の為に手がけた総額21億円の豆プロジェクトですが、計画の初期から完成までほぼ一人でやってため、深い思い出が残っています。ニチメンでは、一人でプロジェクトをやることはなかったが、私の出向先は小さな会社で人が居なかった。CBCは、大変勉強になりましたし、楽しませてもらいました。

此の計画には、河西副社長、高橋常務、水庫本部長、池辺ロンドン機械部長に暖かい御支援を頂きました。そのため、ニチメンの出資も得ることができ、またニチメン・ブダペスト事務所にもCBCに入居して頂きました。

計画の概要

建築総面積：約14，000m 2
フ　ロ　ア：地上10階、地下１階
構　　造：鉄筋コンクリート
資　本　金：約９億円
借　入　金：約12億円（主借入先：EBRD）
場　　所：ランチッド（鎖橋）とマルギット橋の間、ブダ側、HORVATH　大通り

このプロジェクトは土地代、工事費、許認可費、法務費、等すべてを含めて１平方メートル約15万円で、出来ました。日本で同じようなビルを建てると３倍以上かかります。

ブダペスト旅行の折には是非、CBCを訪問してください。但し、とうの昔に売ってしまい、日本国際協力機構も、ニチメンも今は株主ではありません。

イタリアへの想い

越　野　量　路

私の約20年、3回にわたるイタリア勤務は、1962年11月末、濃霧のミラノ空港に降り立った時から始まる。イタリアは、太陽の国として知られており、空港を降り間違えたのではないかとさえ思った。

長期のイタリア在勤で、この国の思い出は尽きない。見る夢も、イタリアを舞台にしたものが未だに多い。

何について書こうかと考えたが、仕事にも関係のあったイタリア人の温かい心情に触れてみたい。

1980年代の初め、イタリアのある自動車メーカーが、日本製の小型エンジンとミッションの搭載を検討しているとの情報をつかんだ。その日、出張先近くの高速道路からメーカーに電話して、社長秘書と話し、ネゴの端緒を作った。当時、日本製のエンジンはイタリアに輸入禁止であり、エンジン搭載テストさえ不可能であった。そこで、スイスの自動車代理店にあった予備エンジンを陸路イタリアに持ち込むことを思いついた。しかし、スイスとイタリアの国境税関で発覚すれば密輸入、没収は必至であり、逮捕もあり得たのである。私は、大型の乗用車のトランクにエンジンとミッションを詰め込み、重さで喘ぐような車に息子を乗せて、アルプス国境へと向かったのである。

子供を連れて行ったのには理由がある。それより何年か前、内地に一時帰国の折、新品の日本製腕時計を100個、イタリアに持ち帰ったことがあった。当時、ニチメンが欧州で売っていた日本製建設機械の販促用である。ミラノ空港で通関のため長い列を作っていた私を見つけ、未だ幼い娘が「パパー！」と駆け寄って来た。若い税関吏は、仕方ないといった表情で、私をフリーパスで通過させてくれたのである。カバンの中の100個の腕時計もノーチェックであった。

自動車のエンジンは腕時計の比ではないが、同じようなことがこちらの読み通りに起こったのである。

アルプスの税関で、長い行列を作って待たされ、同乗していた息子がシビレを切らして、「早くしてー！」と叫んだ。税関吏は苦笑しながら、私の車を行列から引き出して、トランクも開けずにフリーパスで通関をOKしてくれた。

何とか仕事を決めたいという自分の無鉄砲さに、今更ながら呆れるばかりだが、その後輸入許可も得、日本製エンジンを搭載したイタリア製小型車は、一年後には、十万台以上がイタリア国内を走り回ることになる。競合のイギリス製を完全に追い出してしまった。

子供好きの、イタリアの若い税関吏の温かい心情の賜物であったが、今ならこの事実を明かしてもよいだろう。

日本製エンジンを評価し、採用に踏み切ったイタリア自動車メーカーの社長は、今は亡きデトマーゾ氏であった。労組に対しては常にコワモテの梟雄的人物であり、ネゴも厳しかったが、私のイタリア離任時や、その後の再会時には、涙を流して、送り、迎えてくれたものである。

美術、ファッション、デザイン部門を除いて、イタリアの国際的評価は未だ十分ではないかもしれない。また、イタリア旅行では盗難等、不愉快な経験をされた人も多かろう。（イタリアのために言うなら、かかる犯罪はジプシーや密入国者によるものが多いのだが。）

但し、交流を一歩進めれば、彼らの心の温かさを知ることができる。ある種の不器用さと表裏一体となったイタリア人とは、心の底からの温かい人間的な付き合いができるのである。

無理をして世界一たらんとするどこかの国の人々と異なり、まず自己を、そして家庭を大切に考えていくその思考と作法は、我々も学ぶべきことが多い。

N K B 回 想

吉 水　　稔

綿花でスタートしたニチメンが総合商社への路を辿る過程で　重要な役割を果たした部門の一つに機械部隊の活躍がある。

1960年代から70年代にかけ　日本は高度成長の真っ只中にあり家電/自動車/建設機械等の成長著しくまだ大戦後の復興の途上にあった世界市場に対し　商社主導による日本製品の輸出に拍車が掛かった時代であった。

建設機械の市場は　米国キャタピラー社が断トツに先行しており　日本メーカーの小松製品は後発ながらもキャタピラーに追いつき追い越せを標語に輸出注力したが　カントリーリスクの大きい海外市場進出は商社経由が主体で　当時の西独・フランス・スイス・オーストリー・イタリー・ポルトガルと欧州大陸の大半はニチメンが開発してきた市場であった。

NKB社の正式名は　「NICHIMEN KOMATSU BAUMASCHINEN GmbH,」日本名は　「ニチメン小松建設機械GmbH社」で　1968年　西独市場向け小松ブルドーザーの販売代理店として西独Frankfurt郊外のGross Gerau（グロスゲラウ）市に設立された。

西独以外の国は　現地代理店を起用していたが　西独市場はニチメンが直接参入しようと当時の建機車輌部長であった安藤幸男さん（故人　元ニチメン副社長）が　商社の機能は単なる仲介業務ではなく流通にありと　自ら率先して現地会社の支配人となって赴任し設立されたものであった。

年年　メーカーの海外取引の経験知識が向上するに伴い　直貿志向となり「商社機能不要論」等　商社冬の時代、木ヴぇおが喧伝されるようになるが　NKB社設立の意義は　製造はメーカーに、流通は商社にと機能の　を分担して発展共存を図ろうとする　当時としては　極めて先見性に富んだ見識に基づく事業展開であった。

NKB社設立後の業績は順調で　西独市場は1972年にMunchenオリンピックを控えアウトバーン建設初めとするブームを迎えており　1970年、71年と小松ブルドーザー販売も年間200台を越える過去最高の上業績を達成した時期であったが　1971年夏にはニクソン大統領によるドル切り下げ、72年にはMunchenへのテロ襲撃、そして73年のオイルショックと世界の政治・経済は共に激動の変革期にあり　特にオリンピック後の西独経済は急速に減速していき　NKB社の業績も低下していった。

市場が縮小する過程では　限られた代理店口銭が削られる一方となり　原価コントロールしているメーカー小松に対するフラストレーションが増大していった。

市場のNeedsも土木工事から都市型工事に移り　ブルドーザーからエクスキャベーターへと取扱製品レンジ拡大の必要に迫られたが　当時小松はブルドーザー以外の製品がライセンス等の理由から西独には導入できず　為に　NKB生き残りを賭け　多田野のトラッククレーン、米国ミシガン社のWheelドーザー、日立建機のショベルドーザーと他社製品の取り扱いへと転換していくものの「時　利あらず」で景気後退時期に直面し　業績的には非常に苦戦を強いられるようになった。

一方　主力メーカーである小松も海外取引の実力向上に伴い　商社排除し流通に直接関与しようとした為　NKB社とのPolicy　Gapが次第に拡大し　1981年に至りNKB社の経営権を小松に移譲しニチメンは撤収することになった。

同時に　ニチメンの欧州大陸他国に於ける商権も　最終的には小松に吸収されるところとなり流通に商社機能を見出し　小松共々共存共栄を図ろうとした本事業が挫折することとなった。

1968年の設立から1981年の撤収までの13年間のNKB社栄枯盛衰には　商社機能を何処に求めるかの課題に対する挑戦の縮図があり　メーカーとのPower Balanceが崩れた時或いは商社機能としての価値感が失われた時に　存在が否定されるリスクが発生するという今も通じる大きな教訓であった。

1971年7月　私はNKB社の財務経理担当としてGross　Gerauへ赴任した。
Gross　Gerau市は　Frankfurt南西約60kmに位置し　丁度中間点にFrankfurt　空港がある。
海外からの訪問客は　多くが空港からFrankfurt市内へ向かうが　G/Gerau市は反対方向にある為滅多に立ち寄れない位置ではあったが、NKB設営に際しては　西ドイツのほぼ中央にあるFrankfurt市に近接していること、仏Poclain社（同業者）のデポがあること、並びに鉄道に隣接した工場・倉庫敷地であること等Distributionとしての立地に恵まれていると判断されたものである。

Frankfurtは金融の中心であり　多くの邦銀が支店・事務所を開設しており　本社取引との関係から　三和・東銀・興銀・大和との交流も多く　たまに日銀の駐在員も来社された折には工場・倉庫を視察し「日本商社は防人」であるとNKBのオペレーションに感銘されたことを鮮明に覚えている。

赴任に際し　上司の財務部長国領和彦さん（元ニチメン専務取締役）からは　NKB社に骨を埋める覚悟で行けと言われ　そのつもりで赴任したが　事実　そのまま1978年7月帰国までの7年間　在籍することとなり　私のその後ニチメン人生での貴重な体験となった。

NKBの7年間は上司に恵まれ　安藤幸男／持田稔（故人）／丸山修作（元ニチメン副社長）さんの三代の支配人に仕えることになった。
安藤さんは　その人柄は豪放磊落で細心の気配りを併せ持っておられ　ドイツ人雇員からも大変尊敬されていた。

持田さんには　私は大変申し訳なく思っている。 増加する部品の管理と経理システムのコンピューター化をしようと独Kienzleのコンピューターを導入したが　結局IBMに切り替えるまでうまくいかずご迷惑を掛けたにも関わらず　我慢強く決して怒らない穏やかな人格者であった。

丸山さんは　公私共にお世話になった。支配人として在籍中は　NKB社が最も困難に直面していた時期にも関わらず　大変多くの人たちが激励にGross Gerauに立ち寄られる等　丸山さんの人望の厚さが伺われ　また問題に直面した時の対応・決断の素早さは大変教訓となった。
明るいお人柄には　何かにつけ　元気つけられ　救われたたことが多かった。

私の7年間のNKB社在籍中には歴代支配人に加え　支配人を補佐した大森啓作、柳田望、大和田忍さんほか優秀な先輩諸氏との交流、またコンピューターの導入に注力してくれた野田稔さんそしてNKB社撤収の地味ながら非常に困難な業務を担当した私の後任の宮本正博さん等数え切れない人々からの支えがあって　その後の私の人生があったと今改めて痛感しており、貴重な体験させて頂いたことに感謝する次第であります。

スペインの思い出

箕作武彦

スペインとの出会い

私がニチメンの海外研修生として初めてスペインに就任したのが1965年ですから同国との出会いは40年以上も前のことで、2度の駐在を終えて帰国したのが1974年で、これ又一世代以上前の話ということになります。

そんな昔の事でありながらスペインは私にとって未だに懐かしく、心を惹かれる国であります。今でも1日に一度はスペインのことを思い出しております。駐在の時期が非常に若かったことも当然懐かしさの重要な要因の一つでありますが、スペインという国は何か人、特に我々日本人に訴えるものを持っているように思われますので、大昔の話を聞いて下さい。

スペインは私が初めて体験した外国です。その第一印象は、人々が笑顔で親切だというものでしたが、同時に数世紀以前に世界を制覇した国という誇りとか勢いと言うものは感じられず、何かひっそりとしているというものでした。市民戦争の終了が1939年で,その後フランコ政権は国際的に孤立した為、4分の1世紀後の当時でも国民一般に何かに恐れるといった雰囲気が感じられました。その所為か、経済発展がたち遅れており、当時高度成長で欧米に追いつけ追い越せという強力なエネルギーと勢いのあった日本人の目には、スペインは実際よりも停滞して見えたのかも知れません。

当時の為替は1ドル360円の固定相場制で、日本も外貨が不足しておりましたが、スペインは観光以外に大きな輸出産業はなく厳しい輸入制限が行なわれておりました。日本とは、日・西貿易協定で一定のスペイン米を輸入する見返りに僅かな機械類の輸入を認めるという限定的な通商関係でした。

当時の日本は世界最大の米の輸入国でした。お米は政府管理の物資でしたから、購入者は食糧庁でスペイン米は、SRIAというニチメンを含む輸入商社5社から成る業者団体が窓口でした。

1965年の日・西貿易協定は、2万トンのスペイン米を購入する事で合意、米の輸入契約はSRIAが行う事と成り、マドリードに事務所のあるニチメンの駐在員として着任早々で西も東も分からない小生が契約書にサインをしました。相手はスペインの食糧庁長官のデ・ラ・フエンテという人物でした。

この“歴史的文書”は、現在でもスペイン食糧庁の何処かに残っているかもしれません。

スペインそしてスペイン人

マドリードの生活は、驚く事ばかりでした。先ず町を歩く男女が全て美男・美女ばかりに見えました。身だしなみも立派で何処の貴族かと見紛う人達でした。その後分かった事は、スペイン人は誇り高く“イイ格好シ”で、そこそこ見られる服装でなければ日中は外出しない程だとの事でした。

事の真偽は兎も角、平日のスーパーや、市場等の庶民的な場所で一張羅を着込んで肉や野菜や日用品の買物をしている人を良く見かけました。スペイン戦争終結後食糧不足の為、充分に食べられないので、パン屑を服に振りかけ「今たらふく食ってきた所」を演出している人や、Yシャツが高くて買えない消費者の為に、背広から表に出る袖口と襟の部分だけを売っている店があったそうです。

夕食でもびっくりしました。夜8時ごろレストランに行ったところ閉まっているのです。暫くして灯りが点されたので入って見たところ、8時半開店と言う事でした。当時マドリードのレストランは、標準的

には午後1時―4時頃までの昼食時と夜8時半頃から11時半頃までの夕食時の2度開店しており、高級なレストランほど夕食の開店時間が遅いという傾向がありました。

最初の頃、レストランで食事をするのに長い時間を要しました。その理由は、給仕達が近づいて呉れないのです。当初スペイン語がわからないので英語で注文しましたが、どうやら、外国人が入るレストランでは、英語がしゃべれる事が採用の条件だった様です。

“イイ格好シ”なので仲間の前で英語が上手く話せない事がばれないようにしたのだと思います。

スペイン語が分かるようになってからは、食事時間は大幅に節約出来ました。昼の休憩時間が長い為に、人々は家に帰って昼食をとります。

1日が2度使えるので考え方によっては有効な面もありますが、ラッシュ時間帯が1日4回あるなど、問題点もある様です。

タブラオ（フラメンコ劇場）は、真夜中の12時頃開き、明方の4時頃までが公演時間です。明日は少し眠いだろうが、ままよと楽しい時間を過ごすわけです。

当時は、スペイン人の95％がカトリックの信者だと謂われておりました。カルメンに代表される様にスペイン人は一般に“熱し易く、冷めやすい”人が多いと謂われており、スペイン人自身もそう思っているようでしたから、離婚の許されないカトリック教の信者が多いことに不思議な感じを持ちましたが、あるスペイン人が「だから、カトリックの方が良いのだ。」という説明をしてくれました。

セマナ・サンタ（イースター）は、自分達が如何に信心深いかを示す機会でしたから、レストラン、商店は早仕舞い、映画館は宗教色の強い映画しか上映しないという徹底ぶりでした。

着飾った聖母像を中心にマドリードの市中を練り歩くイースターの行列・行進も見事でしたが、地方都市のそれは一種異様な怖くなるような雰囲気を醸し出して一見に値する催しものでした。

各都市にはそれぞれ守護神がおりますが、マドリードの守護神は、イシドロと言う聖人で私の記憶では5月17日からサン・イシドロのお祭りが始まり、15日間毎日連続で闘牛が行なわれます。最近では、若者の憧れはフットボール選手になる事だと思いますが、当時闘牛士は、若い青年たちの夢だった様です。スペイン人の友人にアフィシオナード（闘牛狂）がおり、よく一緒に闘牛を見に行きました。闘牛は、牛を見ていると残酷なスポーツですが、その友人の説によると、牛を見るのではなく闘牛士が如何に意のままに牛をあしらうかを鑑賞するものだとのことでした。

夏のマドリードは、ある意味で見ものでした。夏休みで誰もいなくなってしまうのです。お金持ちは勿論避暑に行きますが、商店主や、一般の労働者も故郷に戻ったりしてそれなりのヴァカンスを楽しみます。その為、店は閉まり、街は灼熱と静寂が支配する空間になります。

しかも、1週間というような短期間でなく1ヶ月以上も休むのです。スペイン人の当時の収入は一般に日本人よりも低いものでしたが、日本人は残業を入れれば年間14ヶ月は働いていたと思います。彼等は11ヶ月しか働かないでヴァカンスを中心とした人生を送っていた訳です。ヴァカンスを楽しむ為に、その他があるというのが基本です。

ああスペイン！

スペイン人は“イイ格好シ”の外に、その場を大切にすると言うか、相手をがっかりさせまいとする気持ちの強い人達だと思います。マドリードのデパートである人がゴルフボールに赤や黒で刻印された数字の意味を店員に尋ねたところ、やや暫く考えた後に「数字が小さくなるに従って、目には分からない位ほんの少しずつボールが小さくなっていて、ボールのサイズを示すものだ」と答えたそうです。多少正確でなくとも質問者を落胆させてはイケマセン。多少の嘘よりも大切なことがあるのです。

スペインが世界制覇をした時代以降、南米からもたらされた莫大な金・銀はスペインの政治、経済制度

の欠陥により多くは国内に留まらず、スペインは豊かな国にはならなかったと言われます。
何故そうなってしまったのか歴史的な事情が色々あるようですが、科学者が育たなかったのが理由だとする説があります。ニュートン、アインシュタインといった科学の天才を輩出するためには、高度に訓練され組織化された科学研究者の予備軍が必要だと言うのです。
ニュートンを輩出した英国は、その後世界を制覇し、その旧植民地米国は世界のリーダーとなっています。スペインの植民地であった中南米諸国と比較するとその政治力、経済力の差は歴然としています。一体この大きな懸隔が何処から生じたのでしょうか。

私には、この小さな嘘を許すか如何が数世紀後に現われたのでは無いかという気がします。勿論米国でも嘘をつく人は沢山おりますが、その文化的許容度が違うのではないかと思います。

一方で、スペインは沢山の芸術的天才を輩出しております。セルバンテス、ヴェラスケス、ゴヤ、ピカソ、ガウディ、ダリ、カザルス、ロドリーゴ等々枚挙に暇がありません。こちらのほうの天才は、高度に訓練され組織化された予備軍を必要としないのかも知れません。

今ロドリーゴのアランフエス・ギター協奏曲を聴いております。アランフエスは、マドリードの南約50キロの所にある夏の離宮のあった街です。この街にはタホ川が流れていますが、川幅は広くなく水量の多い流れで少し幅の広いところで高貴な人達が船遊びをしていたに違いありません。この協奏曲は、そうした情景を彷彿とさせるものです。タホ川は、トレード辺で急流となり、最後はテジョ川と名を変えてポルトガルのリスボンから大西洋に注いでおります。

天才画家達の絵を夢想しながら、この音楽を聴いておりますと、スペインは、高度に訓練され組織化された予備軍とは別の文明史の要因を抱いている国だと思えてまいります。

NMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNMNM

＊＊＊＊『会報』への投稿および情報提供の御願い　＊＊＊＊

年二回発行の会報です。いつでも皆様のご寄稿、情報をお待ちいたします。

1. 論文、エッセイ、回想記、ノン・フィクション、SHORT STORY、HOT TIP、旅行記、傑作写真 etc.　etc.

2. 詩歌、；短歌、俳句 etc.

3. 部門別OB会、同期会、同好会ニュース etc.

ご協力いただける場合には、最寄の世話人あるいは会報チーム長谷川・高木にご連絡下さい。
（P－31－世話人リストご参照ください）。

ドバイ駐在の帰途、九死に一生を得る

利根川　慎　治

ドバイ駐在員事務所長として、公私共に順風満帆の2年9ヶ月の単身生活を終え、1990年3月24日午後、キャセイ航空のトライスター機で、香港から成田に到着した。

不運にも機は風速20メートル近い横風を受け、激しく3回バウンドしたのち、誘導路の端で止まってしまった。私はビジネスクラスの右端に座っていたが、左側の誰かが「油が漏れてる！」と大声をだしたので、そちらを見ると、左翼付け根にできた1メートルほどの亀裂から、黒いジェット燃料がジャブジャブと流れ出していた。そのうちに、エヴァキュエーションの赤ランプ点滅と機内放送があり、赤い制服の客室乗務員3名が反対側のドアを開き、脱出シュートを使っての脱出方法を簡単に説明後、先に降りて行った。

エコノミークラスの阿鼻叫喚と比べ、我々ビジネスクラスの乗客は、殆ど口もきかずに落ち着いて整列。機内の説明では、手荷物は持たないで、であったが、私は当時、今以上に軽量であったので、重し代わりに、重要書類の入ったアタッシェケースを右手に、ウィスキー2本の入った袋を左手に順番を待つ。10人目位に順番がきたが、一般住宅の3階位の高さの感じで、風は唸りを上げ、脱出シュートは吹き上がっている、下でシュートを押さえるからと、先に出て行った客室乗務員は一人も居ない（真っ先に逃げたらしい）。前の人の着地と同時に脱出、すでに10センチ以上溜まっている黒い油の中に飛び込む。眼鏡やうちポケットのペンは吹っ飛び、背広の肘やズボンの尻は大きく裂け，手のひらは血だらけになっている（降下時のスピードを落とすため、シュート表面が細かいいぼ状になっていたためらしい）。眼鏡をやっと見つけ出し、200メートル程離れた所まで走り、迎えのバスを待つ。

中国人が殆どと思われるエコノミークラスはまだ脱出中で、周りを見るとその光景を撮影している人がいたので、私もコンパクトカメラで数枚撮影。（その写真は翌日人事部への報告に使ったが、中には読売新聞に送り、「読者による報道写真」で一席をとった人が居た・・・世の中には抜け目の無い人が居るものだと感心。）やがてバスが来て空港ビルに到着。キャセイが乗客全員を近くのホテルのロビーに案内し、お詫びと今後の説明をするので待って欲しいとの事だったが、一時間以上待っても進展なく、（エコノミークラスでは、脱出シュートの途中から転落し、腰を骨折など十数名のけが人が出たので、そちらの対応で忙しく、無事な客は後回しにされたらしいが）その間、たばこも吸えない（イライラして思わず吸おうとしたところ、「引火しますよ！」と係員がとんできた）。

一向に埒が明かないので、キャセイの日本人係員から、自宅までのタクシー代を払うとの確約を取り付け、タクシーに乗車。油の臭いが強烈なので、運転手にビニールシートを借りて体に巻きつけ、窓を開けたまま、寒いのを我慢して東京駅近くまで来たが、運転手が「吐き気がするので、すまないが降りてくれ」と言うので、やむなく八重洲口で下車。あらためて乗り場に並んだが、周りの人は鼻をつまんだり、逃げてゆく始末。ぼろぼろの背広と悪臭で、生まれて初めてホームレスの心境を味わった。
一時間後やっと家族と再会。

「たら」「れば」はゴルフのみではなく、人生にも無いと思うが、もし脱出前の機内で誰かが誤ってライターを擦ったら、（機内には既にもの凄い燃料の臭いがたちこめていた）間違いなく大爆発が起こり、私はこの拙文を書いていない訳で、幸にも生き長らえた以上、一日一日を大切にして、楽しく生きてゆきたいと思う。

手塚敏夫さんの想い出

高　尾　　勝

紙パルプ部OB会長の手塚さんが2007年10月15日に亡くなられた。
手塚さんの将棋・釣り好き、同僚・後輩が親しみを込めたニックネーム「ごりちゃん」、はニチメン社内でも広く知られていましたが、思い出す侭に少し綴ってみます。

私が入社した昭和34年の年央に、繊維原料部パルプ課と物資部紙課が合併して　東京紙パルプ部（パルプ課、紙業課、輸出紙業課）が設立され、谷崎昌雄さんが副部長　手塚さんは輸出紙業課の課長代理で平松保雄さんが課長でした。

設立時の輸出紙業課員は塚越（故人）、中谷さん。その後　新崎盛晨、大崎靖也（故人）、高木正博さんなどが加わった。
当時、輸出紙業課は大綿商事と協力しつつ、インドネシア・中東を主要市場としていたが、日本からの紙輸出そのものが先細りになり、課全体が大きく膨張することはありませんでした。

香港から帰国された小安茂杜夫さんがパルプ課課長代理に着任され、私が担当者として輸出入業務を始めることになり、コレポンを加工繊維部の板倉さん（のち日大教員）に教わる傍ら手塚さんにも随分教わった。課が異なるので仕事の面で教わることはなかったが、自称２段腕自慢の将棋のお相手をさせられた。
その後　八瀬昌雄さんが紙業課課長代理でいらして３人でしばしば将棋を指し、白帯の私が偶に勝つと手塚さんは大変悔しがったものでしたが、４段を取ったと晩年誇らしげに仰っておられました。

楽天的な天衣無縫の性格で大変な話し好き、酒席もお好きで阿波踊りが手塚さんの売りでした。得意先との話に夢中になって中々神輿を上げない手塚さんのお供をした課員が時に愚痴をこぼすこともありましたし、お家族の方々も話し好きを認めておられました。体質的なものか、５回の抗癌剤治療も全く苦しまなかった由で、ご本人は死を意識することは無かったのではないかと周囲の方々が漏らしておられます。

手塚さんは幸せな人生を送られたものと思います。

合　掌

濱田雄三さんを偲ぶ

奥　田　　哲

平素、きわめて、ご健康でありました、濱田雄三さんが突如として2006年11月、聖路加国際病院に入院され、ご家族の手を尽くされた看護の甲斐もなく、2008年1月11日長寿を全うされました。
享年91歳でした。

私が、濱田さんと初めてお会いしたのは、濱田さんが香港支店からジャカルタ駐在事務所に所長として移駐されてこられた、1970年4月のころでした。
当時のインドネシアは政情の混乱時期を過ぎ、スハルト政権の地盤も堅固なものになりつつありました。

しかし、窃盗、強盗の類は依然多く不安定な世情であった為，10数名の駐在員は支店長を含め皆単身赴任でありました。

濱田さんは1956年、1965年と3度目のジャカルタ駐在で、インドネシアの甘いも辛いも良くご存知で、私が、3年間の駐在を過ぎる頃、一週間だけ妻子を自費で、呼び寄せることを許可して頂いた事を今もって感謝し続けております。
妻子を一時呼び寄せたのは、当時のニチメン・ジャカルタ駐在事務所では、私が初めてではなかったかと思います。

その後、濱田さんと親しくお付合いさせて頂いたのは1998年7月10日［帝国ホテル］で第一回のインドネシア会を開催した頃からです。
濱田さんには、2005年6月　第8回目のインドネシア会迄、毎回ご参加頂きました。
私は、インドネシア会のお世話をさせて頂いたせいか、5年前に、濱田さんから自作の絵画をいただいたことがあります。

その絵は、14cm×30cmの額に入った横長の絵で、1970年4月19日の朝のジャカルタのハサヌディン社宅を中心とした水彩の風景画であります。
懐かしい風景で、今でも居間に飾ってあります。

ご病気を知って病院へお見舞いに行ったとき、イタリアを旅行されたときお描きになったフィレンツにある、ドゥオーモなどの絵を壁に掛けておられたのを見て驚きました。
それらの絵はご趣味の範疇を超えておられ、玄人肌の絵でありました。濱田さんのお仕事のときの姿だけでなく、私生活の一端をも、知りえたことは喜びに耐えません。

濱田さんはニチメンをこよなく愛され、2006年6月のニチメン東京社友会の発足にあたり、会の発展のため多額のご寄付をされたと、聞いております。

ここに，濱田雄三さんの生前のご厚誼を感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

合　掌

住山忠雄さんを偲ぶ

福　原　昭　二

住山さんが亡くなられました。ニチメンに入社以来、中国貿易一筋に活躍された方である。業界でも有名であったが、中国に知己が多く、北京の貿易公司を訪ねると、先ず「住山先生はお元気ですか」と聞かれ、それから本題にはいったものである。

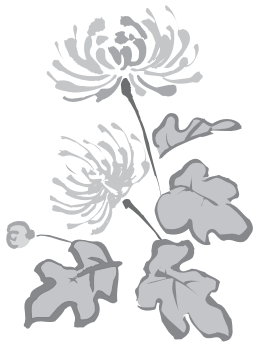
住山さんは上海で生まれ、上海商業で北京語を習い、その後天津華語専門学校で本格的に学習されている。
昭和14年入隊。徐州警備司令部に属し安徽省宿県（宿州市）に於いて情報活動に従事された。ある時討伐で、新四軍ゲリラの隊長と思しき男潘成傑が捕まった。住山さんは上司の許可を得て、彼の身柄を預かり、長い話し合いを通じて敵側の情報を入手したのである。その功績により軍から表彰されている。昭和18年、部隊は南方へ転戦と決まり、住山さんは現地除隊で上海へ帰還。しかし後継部隊に替わると情況は一変し、一旦は釈放された潘成傑は憲兵隊から投獄監禁されたので、住山さんは八方手を尽くして彼を救出する。更に宿県からは、日本軍から住民が痛めつけられると救援を求めてきたので、住山さんは新婚のご夫人を伴って宿県に赴き劣悪な生活条件のもと、連日、軍司令部に通い、捕らわれの住民を助け出すことに専念された。潘成傑との仲は一段と深まり、住民から感謝されたのは言うまでもない。住山さんの中国語は、学校で勉強された基礎の上に、こうした中国人との実生活を通じて生きた言葉を会得されていたのである。

終戦引揚げ後は商売で東奔西走されたが、新しい中国語を習得すべく、倉石中国語講習会（日中学院の前身）で研鑽を積まれる。その後外務省の中国語の試験にパスし日中輸出入組合へ就職された。初仕事は南郷理事長（元日綿実業社長）の秘書兼総務課長として、中国側関係部門への挨拶回りに同行され、陳毅副首相との会談に立ち会われている。第四次日中貿易協定では、1957年、池田正之輔議員を団長とする訪中団の主席通訳として中国側と交渉を行った。その翌年交渉は妥結したが、長崎の国旗事件のため破棄を通告され、その後日中貿易は全面停止となった。南郷理事長は辞職されることとなる。

1959年、南郷理事長のお世話で日綿実業に入社された。当初鉄鋼部に在籍されたが、貿易再開が決まって東西貿易部（後に中国部と改名）に配属。国交回復以前の中国貿易は中国側が提示した「政治三原則」と「貿易三原則」の承認が条件であった。わが社は福井社長の英断により率先してこの提示を受け入れ総合商社では１番目に友好商社の指定をうけた。わが社の姿勢が評価されたのか、1964年９月、中国技術進口公司よりニチボーのビニロンプラントの引き合いが持ち込まれた。長い商談の末100億円で成約した。この間ニチボーバレーボールチームと中国チームとの対戦を周恩来総理と原吉平社長が観戦されることもあったが、残念なことに「吉田書簡」のため、突然の契約失効が通告された。その後歴代の社長訪中に同行され中国各部門への表敬訪問を行われた。ブルドーザーの大量成約では小松製作所の河合良成社長に同行、「日中円元決済」では三和銀行の村野頭取に同行された。日中国交回復後は12回に亘る塩安商談に参加され、ホンダの本田宗一郎社長、ダイエーの中西功社長、小野薬品小野順三社長、サントリーの佐治敬三社長、など政財界の著名人に同行され、わが社の対中商いの増大に貢献された。ご本人の記録によれば訪中歴91回、滞在日数延べ3239日。1992年73歳で退社された。中華民国から人民共和国へと激動の時代を、ひたすら日本と中国の架け橋となって奮闘された真摯な友好人士であった。

住山さんは学校時代柔道をやっておられたとか、がっしりとした体格で業務をこなされていた。報告書やレポートは端正できれいな文字で綴られ、長文でも乱れはなかった。デスクワークの合間、「新華字典」を取り出しては読んでおられた姿が今でも目に浮かぶ。晩年は日中の今後を気にしておられたと聞く。去年２月、電話でお元気な声を拝聴したのが最後になりました。享年89歳。心からご冥福をお祈りいたします。

訃　　報



悔やみ申上げます。

生前の面影を偲び、衷心よりご冥福をお祈り致します。

ニチメン東京社友会

氏　　名	出身部門	死亡年月	享年
富　田　幸　吉		2007年10月	87歳
濱　田　雄　三	化　　工	2008年１月	90歳
上　野　景　一	食　　料	2008年２月	82歳
島　影　力　吉	鉄　　鋼	2008年２月	84歳
雄　谷　芳　夫	機　　械	2008年２月	86歳
増　田　源　爾	化　　工	2008年３月	73歳
住　山　忠　雄	業　　務	2008年４月	89歳

＊印非会員

ニチメン大阪社友会

氏　　名	出身部門	死亡年月	享年
石　田　　勝＊	石　　油	2008年3月	83歳
畑　　典　次＊	繊　　維	2008年3月	79歳
木　股　龍　一	繊　　維	2008年4月	91歳

＊印非会員

《 訂正とお詫び 》

会報３号に誤植と脱字がありましたのでお詫びして下記訂正いたします。

⑴　P－41－「いろは句会」の正しい句は；
　　胡弓の音暗きより生れ風の盆　　太　田　琢　也
　　玻璃の窓冬満月ををさめけり　　塚　本　幸　雄

⑵　P－27－「ローマ人の物語」を読み終えて：（カッコ内誤り）
　　①寛容政策（寛容製作）　　②覇権王国（派遣王国）
　　③善と悪（憎悪）　　④観念的（観念敵）
　　⑤理念通り（理念道理）

⑶　P－35－「ヨーロッパ駆け巡り」（カッコ内誤り）
　　①初めて（始めて）

【編集後記】

2006年、旧“長月会”とはコンセプトを異にする新“社友会”が設立され、OB･OG相互間のコミュニケーションの手段として『会報』を出すことになったが、どのようなものが出来上がるか、確たるアイディアがあったわけではない。今回、第4号に至るまでも暗中模索で来たと云える。

編集部の独断専行の惧れ無きにしも非ずである。従って、皆様からの建設的御意見を何時でもお待ちしております。

世界を駆ける商社マンの社友会につき往時の回想録、エッセイの寄稿があり、会報で初めて知る“あの日、あの時、あの国での物語”は今にしても興味深いものがある。

会報で、重要な情報伝達に、“訃報”がある。会報で初めて知る多くの方々の訃報に，ありし日の面影を偲んで、出来るだけ追悼文を掲載するようにしています。

当会創立総会・懇親会の冒頭で、蝶ネクタイのダンディなお姿で壇上から、ご本人曰く、“これが私のラスト・スピーチです”と言っておられた浜田雄三さん、

将に、そのお言葉の通りに惜しくも本年一月、鬼籍に入られてしまいました。

当会設立当初、財政基盤も弱かった時点で、高額の寄付金をお寄せ下さりました。懇親会におけるラストスピーチの雄姿をお撮りした写真を病床で奥様に自慢されていたと御聞きし、何かホッとしました。

“徒然草”に、“死はかねてより後ろから迫れり”とあります、われら皆等しくやがてこの世に別れを告げます。“願わくば花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃”などと季節を問わずにやってくる運命の足音、せめて今は人生のGolden Ageを謳歌しようと思う。
社友会総会・懇親会参加もその一つ、長生きの証明とも云えましょう。

（長谷川　　洋）

ニチメン東京社友会

〒107－8655　東京都港区赤坂2－14－7
双日㈱内　東館17Ｆ

発　行　人　；倉又　則夫　代表世話人
編集責任者　；長谷川　洋　世話人
アドバイザリー・スタッフ；高木　亨一　世話人
倉持　次雄　世話人
印　刷　所　；㈲　関　内　印　刷